



ヤマトタケルノミコトは、どんな人だったの



南九州や東国を平定しに行ったと伝えられる英雄
だけど、本当にいた人ではないようだよ。

ヤマトタケルノミコト（倭建命、日本武尊）は、「古事記」と「日本書紀」に出てくる、伝説的な英雄ですが、「古事記」と「日本書紀」の間には、いろいろな点でちがひがあります。今は、本当にいた人ではなく、大和朝廷が勢力をのばしていった時代に、各地で伝えられた、いろいろな英雄ばなしが、一人の英雄ばなしとして、まとめられていったのだろう、と見られています。

熊襲を討ちに、南九州に行った

ヤマトタケルノミコトは、第12代景行天皇の子で、初めは小碓命という名前です。父がよびよせた姫を、双子の兄の大碓命が横取りしたのをおこって、兄を殺します。父は、ミコトのきょう暴な性格をおそれて、南九州の熊襲を討ちに行かせます。ミコトは、おばの倭比売からもらった衣服で女装し、宴会にまぎれこんで、熊襲建兄弟を殺します。熊襲建の弟は、死に際に、ミコトの勇気をたたえて、「倭建」の名をあたえます。

蝦夷を平定するため、東国に行った

大和に帰ったミコトは、すぐに、東国の蝦夷を平定するよう、命令されます。東国に行き、野火で焼き殺されようとしたとき、倭比売からもらった草薙剣と火打ちの袋を使って、助かります。また、走水の海（浦賀水道）で、船があらしにあったとき、きさきの弟橘比売が、海の神へのいけにえとなって、海に飛びこみ、あらしをしずめます。各地を平定して、帰るとちゅう、尾張（愛知県）で美夜受比売と再婚します。草薙剣を比売にあずけ、伊吹山の悪い神を討ちに行ったとき、神の毒気にあてられて、病気になります。そして、伊勢（三重県）の能煩野で、故郷を思う歌をよんで亡くなり、白鳥となって飛んでいきます。